

Bioregion Economy (5)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17664

バイオリージョン経済(5)

—— エコロジー経済学と生態地域主義 ——

市 原 あ か ね

第20巻2号(2000年3月)の目次

I はじめに

II 生態地域主義者マンフォードの「地域」概念

第22巻1号(2001年11月)の目次

III 相互浸透による生成の場としてのバイオリージョン

1. 生物の多様性保全政策中の「バイオリージョン」

2. バイオリージョナリズム

第24巻1号(2003年11月)の目次

3. バイオリージョナリズムとその批判についての検討

(1)人間の主体性と自然の能動性, 社会的媒介性と自然的媒介性

(2)自然のリアリティ・アクチュアリティと公共圏, 権力

(3)自然の能動性と人間の自由-存在論的規定性としての自然的媒介性

第24巻2号(2004年3月)の目次

(4)生態地域主義の社会的媒介性と自然的媒介性

今号の目次

(5)ナチズム、ファシズムとの類縁性にかかわる批判と検討

4. バイオリージョナリズムにかかわる検討のまとめ

以下次号

IV 相互浸透の場としてのバイオリージョンと共進化論的エコロジー経済学の展望

3. バイオリージョナリズムとその批判についての検討

(5) ナチズム、ファシズムとの類縁性にかかわる批判と検討

a. コミュニタリアニズムの側面へのリベラリズム的批判

バイオリージョナリズムは、バイオリージョンを基盤に形成される社会を価値共同体として展望しているといえるだろう。バイオリージョンに依拠して暮らす社会は、バイオリージョンの制約を受け入れざるをえないがゆえに

それに即した生活様式を形成し、固有の仕方では地域の自然に働きかける。その結果、バイオリージョンについての深い理解をもち、バイオリージョンを基盤にした等身大の生活世界をとおして自己を了解する。そのような固有の文化は自身を媒介する固有の労働と言語、言説を発達させ、コスモロジーや価値体系を共有するだろうというわけである。

場所や生命を含む共同体への帰属感の表明と強調に関しては、ペパーもハーヴェイもナチズムに通ずる危険を指摘している。生態系とコミュニティへの忠誠を重視する「モラル・コミュニティ」は、ナショナリズム的アイデンティティの形成になりかねず、ファシズムや排他主義、新右翼（New Right）に結びつく可能性をもつというのである⁽¹⁾。また、ハーヴェイは、ハイデガーの実存の意義を認めつつも、その無媒介性を批判し、実存や帰属感が激しい情動をとまなうことの危険性に注意を促している。そして、フランクフルト学派の「啓蒙の弁証法」と疎外論を、啓蒙を捨てない覚悟の上で引き受けようと提案する⁽²⁾。

これらは、別の言い方をすれば、バイオリージョナリズムのコミュニタリアニズムとしての側面を批判したものといえよう⁽³⁾。環境のコモンズとしての側面に注目する議論は、共通の利害ないし共通善としての環境とその享受にかかわる原則を、さまざまな規模で想定ないし構想するものである。したがって、存在条件としての最低限であっても、文化や伝統など集団的アイデンティティにかかわって語られるアメニティであっても、さまざまな規模の何らかの価値と義務やモラルの共同体が議論の基盤をなすことは明らかである。この側面は、さまざまな程度で多くの環境論に見出すことができる。

コミュニタリアニズムという道徳・価値の共同体が内部の抑圧と排他的な危険性をはらむという指摘は、「バイオリージョン経済(3)」で取り上げたように構成主義や自由主義の主張に見ることができる。後者については、アルネ・ネスらディープエコロジストを批判するリュック・フェリを代表的な論客として紹介した。また、自由主義的正義論のロールズは、正義を定義するにあたって判断する主体が属性を脱ぎ捨て「原初状態」に抽象化されることを要請する⁽⁴⁾。こうしたロールズの主張は、特定の価値共同体の立場から正義ないし公正を論ずることの不可能性を指摘したものと読むことができる。

しかし、これらの批判が価値やモラルの共同体の存在を一切否定してしまうのなら、あらゆる少数グループの権利擁護も復権も不可能となる。また、環境にかかわる利害を共有する集団の存在を否定することは現実の存在条件の違いを否定することにもつながり、非現実的であると同時に、正義ないし公正を論ずる上でもナンセンスである（利害集団を定義する者に、その線引きから漏れる者への感受性が要求されると言う点は賛成だが）。例えば、「原初状態」という仮構は利害集団の存在を前提してはじめて意義をもつ。この仮構の意義は、社会的属性を離れることで成立するユートピアとしての「コミュニケーション的合理性」の空間、「無縁」の公共性空間の批判的な力を呼び起こす点にある⁽⁵⁾。つまり、ロールズら自由主義的正義論の意義は、価値やモラルの共同体の存在を前提した上で、異なる価値共同体への互いの要請を語る点に見出すことができるのである。人間の他者理解は自身の物質的・社会的属性に依拠し価値共同体や常識に安住しがちであるから、それを打破し公正を築きうる場や存在様式（積極的な意味でのデラシネのような）を内在化せよという要請である。

筆者は、このような批判の意義を、「バイオリージョン経済(3)」でアラン・リビエツのプランを採用して述べたように、価値やモラル・義務の共同体を生成的な批判と再創造の過程に置くものとしてとらえたい。伝統のような幻想の価値体系にしがみつくのにはうんざりだし、唯一の価値体系をあらゆる人々が共有しているとか共有可能であるとするナイーヴな社会観は現実的ではない。しかし、そもそも正義は現実の利害の対立や新たな集団的利害の形成の中で問われるのであり、そうした利害を調整するメカニズムは価値や利害の主張によらずには形成されない。リベラリズムの批判は、価値共同体の単純な解体ではなく、調整や妥協の過程において批判的公共性という理想を実現させる努力としてこそ意義をもつのではないだろうか。

アレント的な多数性を前提するとき、絶対的な「共通善」も完全な合意も不可能である。環境を媒介とした共通価値やコモンズであっても、対立と抑圧を完全に回避することは不可能だろう⁽⁶⁾。しかし、環境論は、物質的身体的存在としての不自由さを直視せざるを得ず、したがって、物質的社会的利害に縛られたところから価値や正義、「共同性」と呼びうる共通の基盤を模

索せざるを得ない。その際、コミュニタリアニズムや価値共同体に付随する危険を回避するためには、この種の共同体を相対化する社会的水準を確保すること、つまり、公共圏の活性化によって抑圧を解放あるいは抑圧を再構成する過程を社会に組み込むことが求められよう。

ハーヴェイは、この点を、啓蒙を捨てない、普遍主義を捨てないという知的態度と、それを通じて閉鎖主義に堕さない「社会生態プロジェクト」を提案することで克服しようとしている。前半の知的態度は一人一人の決意の水準で克服をめざすものだが、個々人の内なる多数性に注意を向けることも忘れてはならないだろう。また、この側面を社会的文脈で読みかえるなら、リビエッツや筆者のプランと同様の道すじをとることになるだろう。しかし、社会の全体主義的暴力を押しとどめるためには、むしろ後半の、集団間の矛盾や対立の激化を押しえ調整するための現代的課題に即した調整様式ないし発展様式としての「社会生態プロジェクト」こそが求められるだろう。この点は、今日の格差とアノミーの拡大、それに伴うアイデンティティ追求に対する過剰な欲動を念頭におくとき、エコロジー経済学の政策論的課題としての現代性が明らかとなろう。この課題に応えるためには、バイオリージョナリズム的構想の調整様式ないし社会編成様式としての役割を具体的に論じる必要があるが、この点は後にふれることにしよう。

b. 象徴ないし再魔術化の暴力

ハイデガーの「世界内存在」やノルベルグ・シュルツの「ゲニウス・ロキ」は、生活世界に与えられてきた意味の基本的構造、コスモロジーに論及したものであるし、和辻の風土もこうした意味論的な生活世界としての自然を、つまり自己了解としての自然を語ったものと言えよう⁽⁷⁾。バイオリージョナリズムにとっても、特定の場所やその土地の自然について行う文学的行為は、有意味な世界を定め、自己の存在の意義とリアリティを確認するための行為である。こうした生活世界を語ることの意義については、「バイオリジョン経済(3)」でバイオリジョン的リアリティ・アクチュアリティの成立可能性として論じた。

人間存在のリアリティとアイデンティティが、身体活動（これは無媒介のリアリティとして感受されるかもしれない）と場所や生活実践の言語的了解

(無媒介／直接的ではない)をとおして獲得されるという考え方は、人間の物質的実体としてのアクチュアリティが非有機的的身体を含む総体としてあるという見方と相補的なものである。「私」という存在は観念的にも物質的にも「私」では終わらないということである。

しかし、観念の世界にはそれ固有の困難が待ち受けている。

生活世界の自然的側面は、季語や枕詞のような象徴の成熟にともない「風景感覚の型」が生まれ共有されることで充実してきたと考えられよう⁽⁸⁾。オーギュスタン・ペルグはこの点を「生態象徴」として論じた⁽⁹⁾。「風景感覚の型」や「生態象徴」によって認識の対象とされる自然的空間構成は、多くの場合、人間の労働によって変形されてきたものである。言語的型も、実体としての景観的型も、言説の蓄積と更新という言語行為と労働／身体的行為によって媒介され生成された認識・象徴構造であり空間構造である。したがって、一定の永続性を持ちながらも変化し更新されるべきものである。

ウェーバーが脱魔術化としてとらえたのは、豊富な象徴から構成され意味に満ちた生活世界が近代化をとおして解体されていく過程であった。フランクフルト学派は、『啓蒙の弁証法』などを通じてこれを疎外の一形態としており⁽¹⁰⁾、また再魔術化の必要を主張する論者もいる⁽¹¹⁾。また、ハーバーマスの「生活世界のシステムによる内的植民地化」も、生活世界の特殊性を指摘し近代化による解体を危機感をもって表現したものである⁽¹²⁾。これらの文脈で理解するなら、自己了解として世界を語り詩にし場所への帰属感を表明していく行為やそうした作品が多くの人々に共有されることは、この近代の巨大なプロジェクトに抵抗する企てと位置づけることができよう。また、場所についての前近代的な語りや自然認識を尊重し収集することで、抑圧され忘れられた人々の認識構造や象徴構造としての生活世界を呼び戻そうとするのも、同様の意義を持つことになるだろう。

しかし、こうした型や象徴が社会運動や政策に圧縮した形で用いられると、固定され紋切り型になり、往々にして認識の単純化をもたらす動員の手段となってしまう。

たとえば、遺伝子組み換え作物に反対する運動が広がったのはオオカバマダラという美しい蝶が象徴として取り出されたからであり、欧米の捕鯨反対

運動が自身の食文化を相対化する反省的過程をもたないのはイルカや鯨の象徴化によっていると言えよう。問題を圧縮し単純化する象徴の働きと社会資源の動員は切り離すことができないにちがいない。象徴は、問題の広がりをとらえる入口としての働きを持ちはあるが、多くの人々にとっては、新たな認識へと誘う門としてよりもファストフードのような答、それ以上考えを深める必要のない便利な常套句のようなものである。だからこそ動員力を発揮することができるのだろうが、単純化された認識の向こうに様々な事柄が語られずに打ち捨てられてしまう。

また、「伝統」の保全をめざす政策も同様の課題を抱えている。たとえば、EU 共通農業政策とドイツ景観保全政策は、農山村地域の生物生息地としての質の改善をひとつの目標としつつ、そのことを通じて景観という農山村観光インフラを整備し、政策に参加する小規模農民の所得形成をはかるものである。この政策は人間-自然関係を記憶する社会的な方法であり、EU 農産物市場の劣位地域に対する調整的な役割によって地域経済や地域社会の維持に貢献している⁽¹³⁾。しかし、それ故に、ここで再生されているのは死んだ景観であり、本質主義的（オーセンティック）であり、紋切り型である。そうした場所の内部から、自然とたたかいながらあるいは共存しつつ、新しく景観をうみだしたり維持したりする人間の側の生成的な力が失われているのだから。地域の景観についての紋切り型は、世界経済の中での展望を農村観光以外見出せなくなった（それすら多くは絶望的だ）地域社会が最後にしがみついた幻影かもしれない。都市のまなざしで再発見された絵ハガキのような景観が、よくてドイツの景観政策型の農村風景が、観光産業によって、それが見込めない多くの地域では国や自治体のさまざまな政策によって、観光装置として形成され（うまくいけば消費され）ていく⁽¹⁴⁾。

そして、これらの象徴や型はアイデンティティやリアリティの了解と深くかかわっているために、集团的アイデンティティの危機に際して劇的に変形され拡張されることもありうる。その場合、型の内容は幻想のうちに回顧され、具体的で個別的なものが国家のような抽象的象徴に回収、吸収され、御都合主義の魔術がかけられてしまうだろう。そして同時に、アイデンティティを過剰に補強するために、その幻想への強烈な同一化と心的エネルギーの大

量投入が行われてしまうかもしれない。これが、ナチズムや今日の新右翼の背景にある心的状況ではないだろうか。今日、アイデンティティや伝統が求められ語られるのは、経済の空洞化とそれにもとづくアノミーを基盤に、社会が自ら再魔術化を進めている状況ともいえよう。

c. 危機を越える社会生態プロジェクトへ

この集団的自己了解の危機、実存の危機という点では、バイオリージョナリズムや分権的コミュニタリアニズム、あるいはレイモンド・ウィリアムスの戦闘的個別主義も、ファシズムと同じ背景を有していると言わざるをえない。つまり、これらは資本主義の勃興やグローバリゼーションなどの劇的な変動要因によって、国民国家関係や地域間関係、社会集団関係が不安定化し、そうした社会経済編成の急激な変化が社会的な緊張と危機を生み出していることに対する人間の集団的反応であって、アイデンティティを強化し結束力を高めることで危機に対応しようとするものであり、抑えようのない衝動のひとつと考えるべきであろう⁽¹⁵⁾。

こうした共通する問題を抱えているとはいえ、集団的危機意識のすべてをナチズム、ファシズムと同一視し、あるいは集団的暴力をナチズム、ファシズムで代表させてしまうのは歴史認識として単純すぎように思われる。ひとつには、帝国主義的イデオロギーの他者に対する暴力は他の形態でも存在してきた（現在も存在している）し、もう一点は、ナチズムと今日の分権的運動の政治経済的背景の比較分析抜きにそれらを同一視するのは思考方法として乱暴だからである。

この種のイデオロギー批判は、人間認識としては、主意主義的で歴史条件を無視し人間の責任を無限のものとして扱いがちである。こうした態度は、ひとりひとりの決意としては尊敬に値するし、運動論的には一定の意義を持つと考えられるが、客観的な時代背景、物的条件を抱えた人間を理解するという点では不十分な認識枠組みである。今日の分権的アイデンティティ追求の積極面と破壊的側面を認識し、背景にある構造的要因の分析から危機の克服に向けた転換方向を具体的に示すための枠組みこそが求められよう。

グローバリゼーションの進行に応じて地域主義が活発化していることを考えると、この運動を広域的な変動に対する補完的反応として捉えることがで

きる⁽¹⁶⁾。現代の国際社会は、この補完を単なる補完に終わらせ矛盾を深め危機を進行させるままにするのか、それとも多国籍企業や投機的資本の運動との間に妥協を見出し地域間関係の国際的な調整を含む新たな階層的調整様式の構築へと資本主義を展開するのか、あるいはそれらに対する国際市民社会を基盤とした社会的制御を発展させ新たな発展様式を構築するのかが問われているのである。例えば、ナチズム形成期のドイツは、経済的社会的に疲弊した「遅れた」バイエルン地方と世界的な都市間競争に乗り出そうとする優位に立った地域との間に利害の対立と矛盾の激化が進行していた。今日の分権の運動は、国民国家の崩壊した地域では民族紛争を生んでおり、先進国では都市間・地域間競争の視点を強めている。こうした点をふまえるなら、ローカルな決定権の意義と地域間関係を調整し統合をはかることの意義、その両者とかかわって調整様式や発展様式を展望するよう批判的思考を深化させることが求められている。

ここではとりあえず、ワイマール期に育ったドイツ・エコロジー運動がナチズムに対して同調性を持っていたことを分析したウルリヒ・リンゼの検討を引用し、バイオリージョナリズムなどの生態地域主義への教訓としよう⁽¹⁷⁾。

近代批判の一形態としてのエコロジー思想は、農民の土地（自然）との美しい融合や調和のとれた小規模な都市と、それを破壊する騒がしく、不健康な大都市の工業文明を対比する形で各国にあらわれた。これらは産業化と都市化の急激な発展への、階級的、情緒的、知的反応であった。しかし、この反応がどのような「社会生態プロジェクト」の提案として思想的に提示されたかは国によって大きく異なっていた。たとえば、イギリスではラスキンやモリスの社会主義が、アメリカではジェファソン流の農村民主主義がその代表であり、どちらも新しい社会関係を提案するものであった⁽¹⁸⁾。

ドイツでは、19世紀後半第二帝国期にドイツ教養中間層を中心にした反近代主義運動がおこった。「血と土」の決まり文句はこの時期に表われるが、急激に進行する資本主義的变化、都市化と産業化への抵抗感のうち空間的構成ないし美学的枠組みにかかわる部分を「土」が担い、郷土（Heimat）の景観美や天然記念物、保護対象としての自然を発見し、郷土保全（Heimatschutz）運動を象徴として支えていった⁽¹⁹⁾。こうしたブルジョア的エ

コロジエ運動は、ワイマール期をとおして、当初の反近代主義は近代との調和に、近代への有機的美の導入に変化し、「民族主義的エコ近代主義」へと変わっていった⁽²⁰⁾。彼ら教養中間層は、反民主主義、反社会主義の保守的なイデオロギーの持ち主であったので、技術的な社会改良に向かいあはしたが、具体的な社会改革のビジョンを示しはしなかった。結局のところ、ワイマール期をへて明確になっていったのは、「保守的な価値観と結び合わされながら発展を続ける国家的産業経済」という彼らの理想だった⁽²¹⁾。

そして、彼らはこの理想の実現をナチズムに賭けていく。が、それは果されず裏切られていった。「その後のナチズムでは——ワイマール時代のあいだにブルジョアジーによる郷土と自然の保護が反動的民族主義を温存しつつ、親近代化路線に変更するという準備段階をへて——このような「ロマン主義的」価値観の複合体全体の言語による政治的統合が行われた——と同時に、その複合体はほぼ完全に破壊されてしまった。なぜなら、中心的なナチズムの政策は、そのようなものを顧みはしなかったからである」⁽²²⁾。

ここから教訓を引き出すなら、技術的なエコ改良主義の問題を指摘できるだろう。「社会生態プロジェクト」の「社会プロジェクト」を新しい内容で示すことができない技術的なエコ改良主義は、近代がとりうるさまざまな社会形態に同化しうる。ナチズムは結局のところ少しもエコロジカルではなかったが、矛盾と対立を調整する政治的ヴィジョンによって対抗することができなかったために恐ろしい結末を迎えることになり、主観的には最終的に裏切られざるをえなかった。

今日の危機においても、具体的な地域の抽象的な国家へのすりかえや吸収、保守的な過去への幻想的回顧はおこっているし、偏狭なナショナリズムは強化されている。しかし、これがかつてと同じような結果を産むのかどうか、今のところ私には判断できない。とにかく、危機ゆえ実存が問われているのにそうした感情の働き自体を止めようとしても無理なことだし、その緊張と欲求は危機からの脱出でしか解消できないだろう。戦闘的状态のもつ「無理」や「強制」が感情を共有していないものにとって抑圧として働くことは確かだが、危機への対応は未来への多様な可能性の模索ともなりうる。バイオリージョナリズムや「戦闘的個別主義」がもつ「社会生態プロジェクト」の積極

面をひき出すためには、提示しようとしている自己像と調整様式・発展様式の注意深い吟味が必要である。私たちは、新しい重層的な関係を構想することと連動させて、重層的で開かれたアイデンティティを獲得していくよりないだろう⁽²³⁾。この点ではバイオリージョナリズム運動の内部においても「コスモポリタン・バイオリージョナリズム」を提唱する論者もあり、今後の展開が期待できるのではないだろうか⁽²⁴⁾。

4. バイオリージョナリズムにかかわる検討のまとめ

(1) エコロジー経済学に提起された課題

Ⅲではこれまで、生物多様性政策の中のバイオリージョン概念、バイオリージョナリズム、そしてバイオリージョナリズムに対するマルクス主義的あるいはリベラリズム的批判を取り上げ検討してきた。この過程で、バイオリージョンを論ずるにあたってのエコロジー経済学にとっての課題が、いくつか見えてきた。筆者は、これらを3点に整理したいと思う。

第1の課題は、概念構成の中に自然の能動性を明確に取り入れ、自然と社会との矛盾を含む関係を論ずる枠組みとして社会－生態システム論を展開することである。

エコロジー経済学は熱力学と経済学の融合として始まり、エントロピー論やエネルギー分析、環境制約、資源制約などの課題を、どちらかというと静態的に論じてきた。その後の環境問題の進展と自然科学的認識の深化を踏まえると、今や新しい水準が出現してきていると言えよう。それは、気候学や生態学との融合をめざし、変容し自己組織化する自然を前提とした空間構造や時空構造にかかわるマネジメント論へと拡張する必要性と可能性である。この点にかかわる展開方向の一つは、ISEEの自然資本概念を出発点として、複雑系ないし自己組織系としての自然を導入することであろう。バイオリージョン概念や生態学の成果に学んだ時空論を議論の土台にすえることは、そうした展開に当たって、自己組織系としての自然の生物的側面を取り出し、自然の階層性や時空構造などの構成と展開の法則性、変形や変化の可能性(人間の物質的自由度)、そして同時に、予測不可能性やハザードとしての側面を取り上げることになるだろう。

この点で注意したいのは、自然が「自然資本」としてとらえられる際には自然の「善」としての側面がとらえられているにすぎないが、変化する自然はハザードやリスクといった「悪」の側面を持つことである。今日自然との関係を調整する必要があるのは、その便益を最大化するためではなく、リスク化、ハザード化が深刻さを増し加速しているようにさえ思われるからである。自然資本としての効用の最大化や最適利用といった制御論は、その論理構造からいって、リスク・ハザードを静態的に扱うことはあっても、その激化をダイナミックな過程としてとらえることはできない。したがって、リスク・ハザードを正面から取り上げる議論には、これまでのアプローチと大きく異なる枠組みが求められる。

この点で大変興味深い議論を展開している学際的集団に、リジリアンス・アライアンスがある。先に、その中からホリングとガンダーソンが中心となって展開してきた適応サイクル概念を中心としたパナーキー論の概略を紹介した。こうした議論を社会経済学と融合し、社会—生態システムの総体を論じる枠組みを構築することは、エコロジー経済学の最重要課題である。その際には、生産力、生活様式・生産様式といった概念を社会—生態関係の物質的・生物学的側面をとらえることができる概念に再定式化することが求められよう。

第2の課題は、そうした社会—生態システムの理論化を経つつ、自然の変化に対する社会の応答を、社会経済システムの危機と自然システムの危機、双方への処方箋として吟味しうる理論枠組みの構築である。

自然は社会的働きかけに応答して変動し、社会経済システムはそうした自然に応答して変化する。第1の観点を踏まえると、エコロジー経済学にとって社会経済システムの発展は、そうした相互参照的な関係が、社会経済的危機やさまざまな社会的課題と要請に応えつつ形成されるものである。批判的エコロジー経済学は、社会経済的矛盾・対立・危機と、社会—自然関係の危機に応答する能力そのもの、そしてその能力の規定要因を分析できなければならないし、政策論や実践論としては能力向上を定義しそのための条件を提示できなければならない。この点を展開するなら、危機をめぐる妥協の様式や危機に触発された新たな発展様式の分析と提示をもその理論的視野に収めるものとなろう。

そのためには、社会と自然の相互参照的な場の形成過程を社会経済的側面から分析し、形成以前と形成過程の最中、形成後のそれぞれの段階における利害の対立をとらえる必要がある。この場の形成は、生活様式・生産様式とともに政治的過程を通してなされる。相互参照的な場の基盤をなす自然システムをコモンズとするなら、その場の形成にかかわる制度総体ないし所有関係を共同所有をひとつの規範として検討することも課題となろう。その際には、法や価値体系、儀礼、様々な知識や行動様式などを危機への対応や自然への応答として体系的に理解することも必要である。

また、相互参照的な場の、社会—生態システムとしての階層性をバイオリージョンからグローバルシステムまで視野に収めつつ、経済的側面のみならず社会的政治的側面からも階層性の分析が可能であり、コモンズを含む自治の領域の再定義や広域調整システムと地域の関連を吟味できることも求められる。例えば、地域社会を、その内部の複雑さを無視せずに、バイオリージョンへの関係と広域的関係のもとにあるものとして吟味でき、政治経済システムの再構築の課題を提示できる枠組みが望まれる。

社会—生態システムの観点からは、社会・経済・政治の階層性は社会的要因のみならず自然的階層性に媒介され形成されるものである。批判的エコロジー経済学は、このことを通して新たな空間編成原理ないし空間編成にかかわる調整枠組みを提示することになるだろう。ローカル、ナショナル、リージョナル、グローバルな経済活動の編成や調整は、単に経済的な関係によってなされるのではエコロジカルな危機を緩和させることはできない。したがって、経済活動は、自然的なダイナミズムや制約に規定されて形成される相互参照的な場の形成に参加せざるを得ないのである。

これらの点から、第3の課題として、環境と調整にかかわる権力のもつ抑圧の可能性を自覚的に取り扱いうる共同所有論あるいは共同マネジメント論の展開が求められよう。

自然の制約や限界、ダイナミズムに応答する社会を構想することは、自然の構成を人間社会に写しこむこととも言える。そうした場合、類や集団としての存続条件と経済体制や個人の存在様式の対立が先鋭化する可能性が常に存在するだろうし、そのような状況は、個人にとっては抑圧的なものとなる

だろう。現代の共同所有論であるコモンズ論を展開するのであれば、その展望をユートピアや予定調和とするのではなく、かつての共同体的所有が持っていた抑圧を新たな形で再構成する側面を直視する必要がある。この点は、環境論がその中心に稀少性ないし制約を位置づけざるをえないが故に抱え込んでしまう困難と理解すべきだろう。

環境にかかわる共同所有は、第一に各自の環境享受を保障するものでなければならないが、同時に稀少性や制約、システムの安定性や適応といった自然の要請に応えるための権力でもある。共同的権力は、環境にかかわる権利と負担関係を定義するに際して、環境的正義として、環境享受の平等と環境的義務の負担の平等を定めることになるだろう。自然の要請に応じることは共同的生存条件の実現であり、自然享受にかかわる各人の権利の前提条件であるので、確かに全面的に個人と対立するものではない。特に、国際的な貧困層の立場からは環境享受の平等を回復することになり、生活状況の改善に資する正義の実現としての側面を期待することができよう。しかし、先の諸条件を満たすためには、構成メンバーである個人や個別主体に対して権利の制限や義務を課さざるをえない。ここから生じる抑圧は、物質的経済的なものと意思や価値観にかかわるものが考えられる。

たとえば、東北のある漁業協同組合は、ハタハタの資源枯渇に直面した際、漁業組合長の英断で漁獲を禁じ資源再生に成功した。このことは地域集団による資源マネジメントの事例として注目に値するが、その結果収入が絶たれ転業せざるを得ない者が出た。環境的正義の観点からは、このような個人が負わなければならなかった悲惨や不利益を放置せず、集団的利益のための負担を調整したり償ったりする社会的制度をより洗練させることが大きな課題となるだろうし、そのことは可能だろう。しかし、一定数の人々のみが漁業者として暮らしていけるという現実そのものは変えようがない。かつての共同体が共同体構成員とそうでない者を厳しく分けたような排他性が、再び出現してしまうことを避けることはできないのである。

また、環境にかかわる正義をどのように定義するかと言う点も、未解明の部分が多い。例えば、エコロジカル・フットプリントの議論などが指摘するように、世界の貧困層と富裕層の間では環境享受をめぐる分配は不平等で先

進国は過剰消費状況にある。しかし、この種の問題は単純に見えて、十分論じつくされてはいない。CO₂排出権のような、世界中のあらゆる人々に平等に配分されるべき権利と扱うことができそうな問題もあるが、土地に固着した自然にかかわる利用権と管理義務はどうだろうか。自然はそもそも不平等に分布しており、条件のよい場所での生産活動には市場を経由して差額地代という超過利潤が発生する。このような不平等を調整するとしたら、どのような原則を立てればよいのだろうか。

また、先進国消費者や多国籍企業エリートなどの階層が、既に獲得している生活様式を簡単に手放すだろうか。環境的正義や公正の原則を軸に世界の貧困層の状況改善を実現するなら、国際政治を多国籍企業や大国による支配の場から、貧困層のエンパワーメントやエンタイトルメントのための承認をめぐる政治の場へと転換しなければならない。しかし、この政治は先進国エリート層には多分に抑圧的とならざるをえないし、現実の存在様式の参照によらない幻想的イデオロギー的な自己了解に基づく「存在規定」を行う階層の存在を念頭におくと、公正や正義は客観的な利害と主観的な利害の両面で抑圧と理解される可能性がある。その上、将来世代を含む議論となれば、事態はますます困難である。

それでも、単に意見の対立が存在する中で政策が実施され「正義」が実現されていくこと自体は、抑圧とは言ってもまだましである。問題は、社会経済的危機を背景としたヒステリックな「にせの正義」への埋没である。高度成長期の公害問題では、環境の危機は社会にとって周辺的な危機ですんでいたが、今日の持続可能性にかかわる危機の場合には社会経済的危機と相俟って出現している。この場合には、環境をテーマに取り込んだ権力が、ナチズムなど同様の抑圧的で権威的、全体主義的様相を示し始めるかもしれない。危機ゆえのアイデンティティの強調が、集団的緊密さを高めて危機に対処しようとする破壊的な方向に向かってしまうかもしれない。

これらの点を批判的に分析し理論化し、象徴界や市民社会にかかわる分析を実施しつつ、客観的な展望としては第2の課題に対する処方箋を示すことができるかが、批判的エコロジー経済学に問われている。存在の客観的物質的側面と象徴的側面の両者を行き来できる概念体系を通して、両者の「通想」

的ないし相互浸透的側面と矛盾し対立する側面，階級階層間の客観的利害対立の分析とイデオロギー批判をなしうるかどうかなのである。

生態地域主義や環境論がコミュニタリアニズム的側面をもつことは，地域社会や国民国家，グローバル社会における生態象徴の生成や社会関係資本の発展の一側面をなし，環境的正義の成熟へ向かう力ともなりうる。この側面が，経済社会の具体的なあり方を通して生じている対立や矛盾に対し，その克服を可能とする信頼関係の基盤として働らく条件を見出すことができるような，理論構築が求められる。

象徴や市民社会とののかかわりでは，意味の領域としての世界（生活世界）の多様性のもとでは，価値の多様性とともにも事実の多様性を前提することが不可欠となるだろう。環境問題への取り組みはさまざまな規模と質の「共通善」の実現をめざすことになるだろうが，不確実性や予測不可能性，認識の不完全性とともにも，意味の多様性を前提しなければならない以上，判断や決定にかかわる公共圏や政治は常に対立と抑圧を内包せざるを得ない。システムの安定性や復元力，持続可能性といった類的，集団的要請は，個々の経験の中で十分に体験することは不可能だし，利害としても現在の世代や個別の利害と対立する場合がある。この点から，世界や価値体系の一元性を前提した認識論的枠組みを選択することはできないし，抑圧のない「共通善」を想定することは結果として抑圧を無視する可能性をもたらすだろう。ここでの課題は，象徴的な意味での世界の多様性，多元性を物質的な存在様式の多様性，多元性とともにも提示し，対立と再生の可能性を示唆する枠組みの構築である。さまざまなタイプの科学や「内的植民地化」，象徴化の暴力といった，認識や価値判断や生活世界にかかわる課題を具体的かつ批判的に論じるために，言説の場としての多様で不完全な公共圏（あるいは市民社会）を分析することができ，また，公共圏による意味や世界の再生を観察し検討することが可能な枠組みを形成しなければならない。

(2) マンフォードとバイオリージョナリズムを再考する

以上の課題の整理をふまえて，もう一度マンフォードの地域複合体，バイオリージョンとバイオリージョナリズム，そしてハーヴェイの「社会と生態系の変化の弁証法」について比較し，これまでの検討のまとめとしよう。

ハーヴェイはある社会関係が固有の生態系を必要とするというところを提示していた。この議論は、まずは既存の剥奪アプローチとして理解することもできるが、生態系と社会の照応関係そのものの問題と照応関係の間の対立の問題という、より広いエコロジー経済学の領域を示している。しかし、ハーヴェイにはこの領域のブレークダウンがない。それは、自然の法則の具体的理解の必要性が指摘されるだけで、自然概念自身は抽象的なままだからである。その結果、人間の自由と自然の支配の関連も観念的な検討で終わってしまったし、戦闘的個別主義に対する二重の評価を追及することもなく終わってしまった。

一方、マンフォード地域複合体やバイオリージョン概念は、地域を自然的過程と社会的過程の総合として、また、自治的領域としてとらえている。

しかし、マンフォードも、ペパーやハーヴェイ同様、最終的には自然の能動性を把握することができていない。マンフォードも、社会と自然の関係を具体的にとらえるための概念構成の欠落という問題を抱えている。だから、人間による自然の生産や改良を強調するが、自然による自然の「生産」や社会の「生産」の視点は明らかにならない。たとえば、彼は、人間は社会という媒介物をとさずに外部環境を利用できないが、人間が外部環境に向き合い、とらえ、同化しそれを効果的に利用するや、もはや外部環境ではなくなると述べる²³⁾。このように言う時、汲みつくすことのできない自然、外部としての自然を想定できないのだから、彼にとって自然は、それ自身の内部にも時間方向にも開かれた無限で能動的な存在ではありえない。

これに対し、バイオリージョン概念では自然は具体的な内容を与えられている。バイオリージョンは、生物的自然の多様性の保全をめざした議論を支えているのだから、第一には自然科学上の概念である。したがって、自然は、特に生物的自然は過程としても構造や状態としても概念構成に登場し、自然の能動性や型、ルールをふまえたものになっている。もちろん、生態学内部での異論の存在を吟味しなければならないし、バイオリージョンの進化について科学的に言えることが今どれだけあるのか疑問ではある。そうした制約つきで、この概念によって今日の自然がもつ基本的構造と一定の能動性を導入している点を評価することができる。

一方、バイオリージョナリズムは、自然のアフォーダンスやレジリアンスを科学的に論じているというよりも実践的なかわりの提案であった。社会と自然の統合された姿を語っているが、人間の社会が自然にいかに関結しているかをとらえる認識方法や概念については断片的で不完全なため、あくまで理念やモラルの根拠としての（生物学的）自然の多様性であり、モラルのひとつとしての（生物学的）自然の多様性の尊重の語りとなっている。河川や生物的多様性にもとづく土地利用という自然的具體性を反映した理念の形成がなされはしたが、抽象的であるがゆえに、自然と社会のダイナミズムの理解という点では議論に欠落が存在するように思われる。

また、技術論については、マンフォードとバイオリージョナリズムでは大きく異なっている（ハーヴェイの場合は、取り上げた論考では技術への具体的な論及はなかった）。アナキズムの系譜にあるバイオリージョナリズムにとって、技術は自然との関連性にも、政治や労働の疎外や実存にもかかわっている。小規模であること、身体的に把握可能で了解可能であることが、自然とかかわる面からも社会を形成する点や日々を生きる点でも大切なこととされている。バイオリージョナリズムの重要な側面である場所への帰属感と土地に媒介されたアイデンティティや自己了解、また、場所を共有し、等身大の生活世界を共有している地域社会に対するアイデンティティと尊重の観念は、小規模技術、小規模分権的社会と照応関係をもってとらえられている。

これに対し、マンフォードの技術論では、現代の遺伝子組換え技術に典型的に表われているように、ますます要素化し還元化し、生態圏の関係性や地域社会の自然的歴史的関係性を切断する「生技術」を批判的に検討することができない。マンフォードが理想としたのは、地域的差異を活かし自然と調和した定住形態を獲得していくこと、そしてそこで人間性の開放を実現していくことだった。現代の「生技術」は、ある種の人間性の解放を遂げているが、地域の自然とかかわりを媒介するものではない。生命にかかわる技術が「生技術」という程度では、「機械」への反発から生まれた「生命」や「有機体」という紋切り型の発想と批判されても仕方ないのかもしれない。

マンフォードは人間の進歩に楽観的だった。たとえば、「文化遺産がふえるにつれて、環境の大部分が役立ち意味あるものになる。ある地域の自然的

条件は、文化的・技術的能力の増大とともに無視されるところか、むしろ実際には拡大される」とし、「現代技術が自然環境の重要性を弱めたという通俗的な考え方は、まさしく真実の正反対のもの」であると述べている⁽²⁶⁾。現代科学技術によって、自然は遺伝子や原子の水準からジェット機の飛ぶ成層圏まで「開発」され利用しつくされているのだから、マンフォードが述べていることは真実だ。

しかし、今日の生産・生活様式における生物的自然とのかかわりに目をむけると、現実にはやはり、現代的生活様式や技術、システムの普遍化が、地域ごとの違いを消失させ、それによってかかわりの多面性を「縮退」させたと考えざるをえない。生物活動の場をおおうコンクリートやアスファルト、常緑樹の林へと変化してゆく雑木林、ユーカリ植林やモノカルチャー、干拓や埋立による湿地の激減、川魚の喪失、身近な生物が絶滅危惧種となっている事態。これらが意味しているのは生物的自然の酷使ではなく関係の単純化、縮退である。

したがって、現代科学技術の特徴は要素化、還元化とともに生物的自然からの縮退を上げなければならない。縮退が招いているのは、地域の自然の全般的な劣化だけではない。生活世界の一部を構成してきた生物的自然の具体性とリアリティの喪失、等身大の生物的自然の了解の喪失と象徴的场所の貧困化をまねき、自然が遠ざかる、自然との間が疎遠になっているという感覚を招いている。現代の科学技術と経済社会システムでは、自然や生物を、多面的な関係性の中でとらえることができないし、そうした関係性と共鳴し応答することもできない。

都市や地域社会の分権的發展を展望したマンフォードではあったが、科学の発展という点では科学技術と社会の弁証法をふまえることができなかったようだ。技術と自然の利用可能性（アフォーダンス）・変動、そして社会の関係について、自然の多様な働きを活かしその変動を妥当な程度に落ち着かせることができる社会・技術なのか、それとも自然とのかかわりを「縮退」させリスク・ハザードの激化を招いてしまう社会・技術なのかという点を、十分に見通すことができなかったのである。

とは言え、バイオリージョンとバイオリージョナリズムがハーヴェイの社

会生態プロジェクトの開放的構想を十分引き受けることができると思えない。課題の2と3で指摘したような、社会的分析の諸問題についてしっかり自覚しており理論的枠組みを発展させているとは言えないからである。この点抜きには、エコロジー経済学としての発展はありえない。小規模な社会と技術の意義を認めるとしても、地域社会内部、地域間関係、グローバル社会の諸階層を対象とした階級間利害やイデオロギーの分析を行い、矛盾や対立を回避しうる社会経済的展望を生態的展望とあわせて提起できなければ、その理念自身を活かすことができないだろう。

さて、以上の整理と課題の提示を踏まえて、どのように生物的自然との相互浸透的空間像、空間構成を視野に入れたダイナミックな社会—生態関係論を形成し、どのようにバイオリージョン概念を現代の社会—生態システムの分析に導入するか。これが次の検討課題である。そのためのエコロジー経済学上の困難は、バイオリージョンの実在性ではない。これはすでに存在を前提しているのだから。問題は、バイオリージョンと相互浸透した社会の実在性をどのように見いだすかである。

地域の自然と相互浸透的な統治主体としての社会、そうした社会の単位性は、モラル、規範として定立することは可能でも、現在存在しているものとして前提することは困難である。山村部や島、途上国の一部の農村など、小規模で閉鎖性の高いコミュニティからなる地域には一定の妥当性があるとしても、経済も文化も解放性を高め、バイオリージョンとの関連を希薄化させている現状にはそぐわない。また、そうした理想から出発してしまっただけで現実には即した課題が見えなくなってしまうかもしれない。

社会や空間の編成原理が複雑化し、少なくとも支配的な原理は生態系に適したものでない現状を無視することなく、生物的自然の多様性の尊重のための理論的構成を描き出すことができるかどうか。生物的自然と多様なかわりをもつ社会の豊かさや課題を吟味できるかどうか。バイオリージョン概念やバイオリージョナリズムの意義を評価しつつ、それぞれの能動性を承認しせめぎあいを描き出す方法論・認識論をもった規範論へと発展させるには、どうしたらいいだろうか。

注

- (1) デイビッド・ペパァ (1996) 『エコロジーの社会 生態社会主義』小倉武一訳 農文協 p-307 (David Pepper (1993), *Eco-socialism From Deep Ecology To Social Justice*, Routledge, p17, 24, 193)。

David Harvey(1996), *Justice, Nature and the Geography of difference*, Blackwell Publishers Ltd., p170-171.197-199.

- (2) Harvey, *ibid.* 199.

- (3) コミュニタリアニズムについては以下の文献をあげることができる。

マッキーヴァー (1975) 『コミュニティ 社会学的研究：社会生活の性質と基本法則に関する一試論』中久郎／松本通晴監訳、ミネルヴァ書房。

マイケル・ウォルツァー (1999) 『正義の領分 多元性と平等の擁護』山口晃訳、而立書房。

Amitai Etzioni (1993), *The Spirit of Community: The Reinvention of American Society*, Simon & Schuster.

ロバート・D・パットナム (2001) 『哲学する民主主義』河田純一訳, NTT 出版。

菊池理夫 (2004) 『現代のコミュニタリアニズムと「第三の道」』, 風行社。

- (4) ジョン・ロールズ『正義論』矢島鈞次監訳, 紀伊国屋書店。

ロールズらリベラリズムの正義論は、人間に付与された具体的関係性を消し去った「原初状態」という架空の次元を要請する。その上で、自身の欲望を維持したままどのように振舞うか判断するということだが、果たしてそのように欲望を維持することができるのかは、コミュニタリアニズム的な観点から疑問視されるところであろう。また、具体的な問題について正義や価値を論じる際には、その抽象性故の認識論上の乱暴さを伴うように思われる。何故なら、原初状態において判断が可能となるためには、「事実」や科学的認識が無条件に事実であり真実でなければならないからである。この点からは、リベラリズムは、「事実」や「真実」の社会的成立に対してナイーブな立場をとり、事実や科学的認識の普遍性そのものが常に揺らいでいる点を見逃ごすことになるのではないだろうか。

- (5) 土屋恵一郎 (1996) 『21世紀問題群ボックス22 正義論／自由論』, 岩波書店。

- (6) ハンナ・アレント (1994) 『人間の条件』志水速雄訳, ちくま学芸文庫。

- (7) マルティン・ハイデガー『存在と時間』桑木務訳, 岩波書店。

クリスチャン・ノルベルグ＝シュルツ『ゲニウス・ロキ 建築の現象学をめざして』加藤邦夫／田崎祐生訳, 住まいの図書館出版局。

和辻哲郎 (1979) 『風土』, 岩波書店。

生活世界としての場所については、他にオットー・フリードリッヒ・ボルノウ ((1978) 『人間と空間』大塚恵一／池川健司／中村浩平訳, せりか書房), オーギュスタン・ベルク ((2002) 『風土学序説』中山元訳, 筑摩書房), 市川達人 ((1996) 『環境, 所有, 風土』『環境哲学の探求』尾関周二編 大月書店)などを参照。

- (8) 『思想の科学』1987, 12 No.97 p-74。

鶴見俊輔は原広司へのインタビューの中で土橋寛を紹介している。原が「様相」として論じたものを鶴見は「趣き」という普通の言葉でいいかえ、等身大の生活世界に関わる場所の議論を展開している。「様相」、「趣き」はベルクの「おもむき」と同義であろう。

- (9) オーギュスタン・ベルク (1994)『風土としての地球』三宅京子訳、筑摩書房、152ページ。

ベルク (1996)『都市の日本所作から共同体へ』宮原信／荒木亨訳、84ページ。

ベルクは人間の場所の認識は、物質的であると同時に象徴的であり、これを切り離すことができると考えること事態がばかっていると考えている。今日の言語的な風景の型は季語などの詩的言語だけでなく科学的な言語をとおして形成されている。これらは、社会階層それぞれの次元で、ベルクのいう生態象徴、生態学的認識と象徴的了解の統合としての意味を獲得していると考えべきなのであろう。

また、こうしたベルクは社会と自然を関係性の内にとらえることを主張しており、本稿の相互浸透の観点にとって興味深い論点を提示している。ただし、ベルクの議論は、存在を現象学的であると同時に生態学的、象徴的であると同時に物質的というように、現象学や意味とのかかわりでとらえる点にある。その際の重要概念が「通感化」を理解するためには、他に、前出の『風土学序説』、『風土の日本』((1992)篠田勝英訳、ちくま学芸文庫)などを参照。

- (10) マックス・ホルクハイマー／テオドル・W・アドルノ (1990)『啓蒙の弁証法』徳永恂訳、岩波書店。

- (11) モリス・バーマン (1989)『デカルトからベイトソンへ 世界の再魔術化』柴田元幸訳、国文社。

- (12) ハーバーマスは、脱魔術化を「システムと生活世界」「内的植民地化」の概念を用いて批判的に語った ((1985)『コミュニケーション的行為の理論』河上倫逸／M・フーブリヒト／平井俊彦訳、未来社)。

- (13) ドイツの連邦自然保護法にもとづく景観政策については多くの報告が存在している。少々古くなってしまったが、以下のものが上げられよう。

勝野武彦 (1989)「西ドイツにおける地域環境の創造」『環境情報科学』18-4。

広田純一・岡本雅美 (1993)「ドイツ農村地域における「近自然化事業」の実態」『環境と公害』Vol.23 No.1。

日本生態系保護協会 (1994)『ビオトープネットワーク』ぎょうせい。

横山秀司 (1995)『景観生態学』古今書院 p-124～155。

横川洋 (1993)「ドイツにおける農業環境政策の現状」『調査と情報』農林中金総合研究所基礎研究部 85号 p-3～4。

横川洋 (1998)「ECにおける環境保全型農業政策に学ぶ——ドイツの例を中心にして——」『こめ問題を学ぶ』福岡自治研・日科福岡支部 自治体研究社。

また、筆者自身による調査報告としては以下のものがある。

市原あかね (1996) 「ドイツにおける自然保護政策・景観保全政策——カールスルーエ市のビオトープネットワーク事業・ミュンヘン市の景観計画を中心に——」『北経調季報』北経経済調査会 Vol.10 No.46 p-1~16。

市原あかね (1998) 「ドイツ・バーデン・ヴュルテンベルグ州にみる農業環境政策」『北経調季報』北経経済調査会 Vol.10 No.46 p-1~34。

- (14) 観光一般、景観政策を否定しているのではないが、レクリエーション過程は現在の生活の一部（消費！）であり、経済活動全体にとっては生産様式の補完である。農山村の抱える困難を転換するには、生産基盤としての意義を見出す新たな生活様式、生産様式、社会関係にかかわる展望が不可欠である。ここ数年の環境政策にかかわる状況の変化は、林業関係者には希望の灯りと成りつつあるが、地域環境運動がこの点で重要な役割を果たしている地域はまだ限られているようである。

この意味での市民運動の混迷はここ石川にも見ることができる。この十数年、石川の権威的ポピュリズム的環境運動（具体的に言えば婦人会に参加する階層の運動）は次々に目先を変えてきた。市民のエネルギーの流れ込む先が次々と変化してゆく。現在、特に情熱を注がれている対象は不在のようであるが、数年前はビオトープとケナフがブームであり（どうした訳かビオトープが「とんぼ池」になってしまっている）、その前はEM菌とリサイクルだった。農山村地域の必死の模索と手を組みこうした活動の積極面をひき出すには、地域の経済構造への理解にもとづく反省的態度や組織が組み込まれる必要がありそうだが、今のところそうした展開は見られない。

- (15) レイモンド・ウィリアムズはロマン主義を「喪失のメランコリー」、近代批判の美学的形態であると評した（(1985)『田舎と都市』晶文社）。共同的で調和のとれた田園の平和（これ自身本当のことだったのだろうか）の喪失を悼み、崩壊の予感におびえ、自分の帰属する（べき）何ものかとして田園（中世や、場合によってはスピードといった近代の象徴さえ！）に対する強烈な憧憬。近代化の進行の中で経験したさまざまな喪失と急激な変化にかかわって生じたアイデンティティの危機、それゆえの混乱した反近代意識。それらが、ロマン主義のテーマだというのである。

この見解にたてば、ナチズムがロマン主義的言説を用い人々を掌握していったのも、今日の地域社会の危機において街並みや景観の美に焦点がおかれるのも、バイオリージョナリズムやそれに先行するアメリカのネイチャー・ライティングの作者たちが自然や場所の美を語るのも、危機にあるアイデンティティがしがみつきたいくなる自己像を得るためなのだと解釈することになるだろう。こうした言説が本質主義に陥りかねないことを考慮すると、バイオリージョナリズムや地域主義などの運動を未来に開かれたものにするためには、特有の困難に立ち向かう

覚悟が必要である。

ところで、和辻の風土論はヨーロッパの自然に対する不正確な知識のうちにかけられると同時に、アジアモンスーン的な風土を日本的と語り、具体的には等身大にしか経験されていないものを国民国家サイズに拡張してしまった点で、当時のナショナリズム的心情を反映したものとなっている。これに対し、アメリカにおける場所の文学、ネイチャー・ライティングやバイオリージョナリズムの成立は、レオポルドのウィルダネスへの関心も含めて、保守化というよりも「アメリカ人」の成立の集団的自覚というべき事態のように思われる。この意味では、真のアメリカは東海岸ではなく西海岸にあるといえよう。

- ⑩ アンソニー・ギデンス (1999)『第三の道－効率と公正の新たな同盟』佐和隆光訳 日本経済新聞社。
- ⑪ ウルリヒ・リンゼ (1990)『生態平和とアナキー』内田俊一・杉村涼子訳 法政大学出版局 (Ulrich Linse (1986) *Ökopax und Anarchie: Eine Geschichte der ökologischen Bewegungen in Deutschland*, Deutscher Taschenbuch Verlag)。
- ⑫ レイモンド・ウィリアムズは、イギリスの反近代主義には農村を理想とするジェントリー的伝統があることを指摘している (前出)。
- ⑬ アンナ・ブリュクナルは、『エコロジー 起源とその展開』(金子務監訳, 河出書房新社)でイギリスとドイツのエコロジー思想を近代化批判として比較し、リンゼ同様、農村や小農を賛美し自然との同化をうたうエコロジー思想は19世紀から両国に見られたとする。が、両者の違いは「血」つまり民族の強調であったと考え、これがナチズムへの同化につながったとしている。
- ⑭ ドイツの自然保護・景観政策は、このように20世紀初頭から始まったが、今日の官僚的で技術的＝専門家的計画システムもワイマール期に端を発するものと思われる。
- ⑮ リンゼ (1990), 前出 p-31。
- ⑯ 同上 p-206。
- ⑰ 「…実際それら(空間, 場所, 環境 引用者)は, 多様な可能性を十分に備えてはいるものの, 生活がどのように生きられるのか, その(しばしば抑圧的な)条件を取り決めてしまうような, 根本的な枠組みを与える決定要因なのである。そのような問題を解放のための闘争のなかで取り上げずに放置しておくわけにはいかない。…中略…理論的实践(傍点による強調)とは, 生きられた生活に備わる戦闘的個別主義と, 世界的大望を定式化するのに十分な批判的な距離と突き放した態度を達成しようとする闘争との, 途切れることのない弁証法として構築されなければならない…」(デイヴィッド・ハーヴェイ「戦闘的個別主義と世界的大望」『現代思想』西部均訳 p-107 (Harvey (1996) p44))。
- ⑱ Mitchell Thomashow (1999) 'Toward a Cosmopolitan Bioregionalism', cit.in: *Bioregionalizm* p121-132.

- ㉔ ルイス・マンフォード（1974）『都市の文化』生田勉訳，鹿島出版会，310～311
ページ。
- ㉕ 同上，318ページ（p-313）。